HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	クセノフォン『ポロイ』における財政政策と倫理
Author(s)	近藤, 和貴
Citation	地域経済経営ネットワーク研究センター年報, 13, 45-47
Issue Date	2024-03-29
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/91707
Type	bulletin (article)
Note	2023年度第1回研究会報告書
File Information	REBN_13_045.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

地域経済経営ネットワーク研究センター年報　第13号
北海道大学　2024.3

＜2023年度第1回研究会報告書＞

クセノフォン『ポロイ』における財政政策と倫理

近藤　和貴[1)]

本報告の目的は，第一に，クセノフォンの『ポロイ』で提案されている財政政策がどのように彼の倫理思想と結びついているかを分析し，第二に，財政と結びついた倫理思想が他のソクラテス学派の思想と比較してどのような特徴を有しているのかを明らかにすることである。

クセノフォンの『ポロイ』は，アテナイへの政策提言がまとめられた書物である。紀元前4世紀，ギリシア諸ポリスにおける覇権争いが続く中，アテナイは第二次海上同盟を結成し，これを足場にペルシア戦争後の栄光ある帝国の再建を試みた。しかし，同盟国に対する強権的な支配は諸都市による反発を招き，同盟諸市戦争で敗北したアテネは，政治的な影響力の低下と財政的な危機に苦しむことになる。したがって，『ポロイ』は，『家政論』といった他の経済的著作と異なり，財政政策や経済一般についての議論ではなく，クセノフォンの祖国アテナイという個別国家に対する，同時代的な救済策の提示という側面が強い。

こうした，時事的な政策論としての特徴に加えて，『ポロイ』には倫理思想の展開という側面もある。クセノフォンはソクラテスの直弟子であり，師の言行を扱った『メモラビリア』の著者でもある。ソクラテスの倫理思想を受け継いだクセノフォンは，『ポロイ』において，単にアテナイの財政政策に焦点を合わせるだけでなく，その収入が正しく獲得されたか，といった倫理的な問題を強調している。『ポロイ』は，単にアテナイの財政再建策を考察したものではなく，むしろ，クセノフォンが考える規範に合わせる形でアテナイの財政政策を再構成する提案といえる。

先行研究においては，とくに『ポロイ』が経済的な議論を多く含むため，そこに近代経済学の萌芽が見いだされるかといった観点から注目される傾向があった。しかし，クセノフォンが財政政策を倫理的フレームワークで論じていることを考慮すれば，当時の政治経済状況に基づく提案と彼の倫理思想がどのようにつながっているか，そして，ソクラテス学派としてそのような思想がどのような特徴を持つのか分析する必要がある。

クセノフォンの提案のうち，第一に注目すべきは外国人の扱いである。彼は，在留外国人に対して，それまで主にアテナイ市民に限定されていた騎兵隊への参加や，土地家屋の所有権を認めることを提案している。これに加えて，とくに商人に対する住居や旅館，店舗の整備，外国人監督官による保護的な管理も考察されている。これらは，アテナイを外国人にとって魅力的なものにし，都市への往来を活性化させるという目的を持っている。海洋国家であるアテナイは収入の大部分を交易に依存していたため，外国人商人を引き付け，交易を促進することは，アテナイの収入増に直結する政策であった。

第二に注目すべきは，銀山の開発である。クセノフォンは，当時の地中海地域で銀の需要が

1）拓殖大学政経学部教授。

恒常的に高いことと，アテナイ領内にあるラウリオン銀山の埋蔵量が多いことに注目し，銀の採掘への積極的な投資を呼びかける。『ポロイ』において，クセノフォンが最も紙幅を割くのは，この銀の採掘についての議論である。とくに，クセノフォンは，銀の採掘にリスクが伴うという懸念に対して丁寧に答えている。彼は，私人における銀採掘の成功例を挙げながら，ポリスを中心としたより安定的な銀採掘の枠組みを考察する。彼は，大量に確保された国有奴隷を用いて，10の部族がリスクを分散して新たな鉱脈の発掘を試みることを提案している。

クセノフォンが，数ある収入源の中でこのような政策に注目したのは，それらが多くの収入をもたらすからだけでなく，彼が『ポロイ』で財政を論じるにあたって倫理を重視したからである。『ポロイ』は，当時のアテナイの政治的リーダーへの批判から始まっている。それによるならば，彼らはアテナイが貧しいので，収入を得るためには他国から奪うしかないと論じていたようである。こうした考えを実際に行動に移したことにより，アテナイは非道徳的行為を実践したのみならず，諸外国から不信の目で見られていた。クセノフォンの政策提案は，他国から奪うという帝国主義的な政策を改め，アテナイが自ら収入源を得ることを目指していた。クセノフォンは，アテナイを倫理的に正すだけでなく，他国との共存を実現しようとしている。

こうしたクセノフォンの議論は，他のソクラテス学派，とくにプラトンとアリストテレスと対照的である。まず，外国人への寛容さにおいてクセノフォンは際立っている。理想国家論を論じる過程で，プラトンもアリストテレスもまずもって国内の思想的統一を重視している。彼らの目的は徳の観点から優れた国家を構築することであり，教育あるいは思想的な教育はその重要な要素である。異なる教育を受け，その結果異なる思想を持った外国人との交流は，国内における教育の成果を台無しにしてしまう恐れがある。したがって，プラトンとアリストテレスは外国人に対しては警戒を怠らない。当然のことながら，両者は貿易にも慎重である。

クセノフォンは金銭の扱いに関しても，プラトンとアリストテレスとは異なる思想を有している。プラトンとアリストテレスが目指す徳とは，金銭に関しては節度である。『国家』において，プラトンが守護者階級における私有財産を否定したことからもわかるように，徳の獲得において金銭は重要な要素ではない。少なくとも，プラトンとアリストテレスが目指す国家は富める国家ではない。この観点からすると，『ポロイ』においてクセノフォンが交易を促進し，銀の採掘を提案していることは特筆に値する。

本報告では，クセノフォンの『ポロイ』を倫理思想の観点から読み解くための論点を整理したが，今後の研究のための多くの課題も明らかになった。第一は，当時の政治経済の文脈とクセノフォンの議論との関係である。当然のことながら，クセノフォンは当時の状況やそれに関する議論を踏まえて政策を考えている。とりわけ，クセノフォンの議論の特徴はこれまでアテナイで常識的とみなされてきた帝国主義的政策に反対する点にある。それゆえ，トゥキュディデスなどに描かれた伝統的なアテナイの帝国主義擁護論や，クセノフォンと同時代のイソクラテスなどの帝国主義論と照らし合わせる必要があるだろう。第二は，プラトンとアリストテレスとの詳細な比較である。クセノフォン，プラトン，アリストテレスは同じソクラテス学派に属しながら，共通点と相違点を持っている。その中でも，とくに『ポロイ』は特異であり，プラトン・アリストテレスとの異同を明らかにすることは思想史的にも重要な課題である。本報告では表面的な特徴から比較を試みたが，より厳密にテキストを検証することが求められる。第三は，『メモラビリア』と『ポロイ』の比較である。クセノフォンは，『メモラビリア』において自らが理解したソクラテスの倫理思想を

記録し，『ポロイ』では自らの名において時事的な問題に関して倫理的な提言を行っている。『ポロイ』における倫理思想の特徴を解明するためには，他のソクラテス学派との比較のみならず，彼自身が考えるソクラテスとの異同を分析する必要がある。これによって，クセノフォンがソクラテスの倫理思想をどのように継承し，また発展させたのかを跡付けることが可能となる。

参考文献

クセノポン〔松本仁助訳〕（2000）『小品集』京都大学学術出版会。

Cristopher Tuplin and Fiona Hobden, eds.,（2004）*Xenophon: Ethical Principles and Historical Enquiry*, Boston: Brill.